

## 郷土室だより

## 第六十三回東京を語る会

## 私の見た昭和の日本橋・京橋の移り変り

講師 川崎 房五郎 氏

## 一 私と京橋図書館の関係

## 東京市史編纂室と京橋図書館

川崎でございます。まず、私と京橋図書館との関係というようなお話をして行こうと思っております。京橋図書館が、ここに出来あがったのは昭和七年だというようなお話です。私が昭和九年に大学を卒業したとき、本当に文字どおりこんな不況は無いという不況時代を迎えていました。文科を出た者に就職先なんかあるもんか、という状態でしたが、先輩の方、もう亡くなられましたが、戸井田道三さん（本などを沢山書いておられる方ですが）そういう方のご尽力で京橋区で区史をやるからとこういうことで、なんとか『京橋区史』の編纂員として京橋区役所に就職したわけでございます。どこでやるかといったときに、幸いなるかな京橋区役所とは別に築地警察署との間に京橋図書館がありまして、その三階に東京市役所の文書課分室という形で『東京市史稿』の市史編纂室がございました。区役所側にも「お前何とか図書館の三階に机をひとつ持って行って先生方の指導を受けながら区史をやれ」という有難い言葉でしたから、

図書館の三階にあった市史編纂室へ行き、そこで文書の読み方などの教えを受けました。正直長年『東京市史稿』をやっておりますが、一番難しいのは古文書よりむしろ手紙なんでございます。お前何年やつてらんなんて言われるんですが、なかなか江戸時代の方の書いた手紙には読めないものがあります。そういう意味でかなり苦労して今日に至りました。

市史編纂室のある限りここに通っていたものですから、そのかたわら『京橋区史』の上巻を出し、それから『日本橋区史』下巻のお手伝いをする。それが終わってしばらくたってから『京橋区史』の下巻にとりかかって、なんとか戦争中に出せということとだったので『京橋区史』上下巻と『日本橋区史』下巻を手伝いました。『日本橋区史』の上巻については顔をのぞかせた程度ですけど、下巻についてはかなり執筆いたしました。それでえっさえっさと日本橋に通って色々な所を見たりしたもんですから、いくらか知っている見たり聞いたりしたお話を、皆さんにしようと、こういうわけなんです。ご存じです。

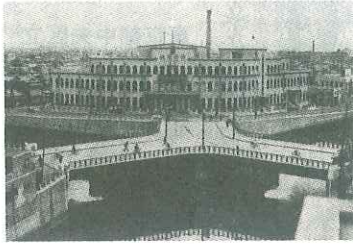
住んでない人間がちょっと日本橋・京橋

の話をするってのは変だと思っただんですが、例えば銀座にお住まいの方が日本橋の事をあまり知らないとか、ましてや日本橋の方が昔からこっちの方に来ない方が多かったですから、京橋のことをあまり知らないという方が多いんです。そういう意味ならば、私が区史のために区内を歩いたことで、いくらか昔の姿を知っている、京橋・日本橋の話を皆さんにお話しようと思えます。

## 三吉橋の評判

まず今の区役所の前にかかっている三吉橋についてお話しします。これは震災後出来たものでございましてね。もちろん白魚橋とか真福寺橋、弾正橋（今は江東区の文化財で八幡様の裏にあります。）が架かっていた。そういう三吉橋と呼ばれて名物だった、三ツ又になつて川へ、区役所の前へ一本で橋をかけたということは、皆さん今なんでもなく区役所へ来るとき、あの橋をお渡りになっていきますけれど、出来た当時はもう大変なものでした。沢山の方々市電に乗ってわざわざ、この三吉橋を見に来たんです。こんな話をすると馬鹿みたいでございますけれど、こういう風にYの字型になつて橋が出来たということ。当時は大変な騒ぎで、「大宮からわざわざ汽車に乗って見に来たんだぞ。」なんて方がありましてね。皆さん今何気なくお渡り

くださるんですが、三吉橋が出来たときの騒ぎは大変なものでございました。この役所の向い側には、当時胃腸病で有名な病院があったりしました。そういう所へ行くとき、皆さん橋を渡りながら川の下をのぞいたりして、「どうして三つ別々にあった橋を一本で間に合わせちゃったんだろう」と大変な評判でございました。日本橋や銀座の方がり見に来たんじゃございません。随分遠くから見においでになりました。そういうことで、三吉橋が当時どんなに騒がれた橋であったかを知っていたきたいと思います。



三吉橋

さて、当時は皆さんに語りようが無いくらいの大不況時代でございました。私が就職した昭和九年ぐらいは、満洲事変などがあった関係で景気も大分良くなってきた頃でした。ただ私が血の気の多い若い頃に勤めたんですから、

今私が中央区を語るのとはまるで違いました、遊ぶ所ばかり探して歩くというような状態でございました。そういうことで銀座にしろ日本橋にしろ、今と見る目が大分違っていたということだけはご了承願いたいと思います。

## 二 震災後の銀座の発展—デパートの進出

何といっても戦前無かったデパートが銀座に三つ出来たことは、土地の人にも一般のここに通って来る人にも大きな変化でございました。江戸時代、白木屋と三越と大丸が日本橋の北と南、それに旅籠町の方にあるといった具合で、離れておりました。鉄道馬車時代、馬車は町を挟んで二つ走っていた。電車が通るときになつて何とか江戸通りを複線にするためどちらかの道を削ってどちらかの道を複線にしようということになりました。そのとき大丸の前の通りを削っちゃえば、大丸は雑踏していたのが、ごたごたせずにお客が来てうれしいついでで賛成し、今の江戸通りが広がったわけでございます。そのときに大丸は、さぞ客がいっぱい来るだろうと思つたのに道がひとつ違つたためにパタッと駄目になつて、明治四十三年か四年頃でしたか、大丸が撤退して大阪へ戻るといふことがあつた

わけでございます。大丸は関東大震災後、丸ビルに進出したんですが駄目で又関西へ撤退して、そして今度東京駅の駅ビルへ出て来た。店の間口の広さで一番だつた大丸が今あんな所にいるわけでございます。

震災後今川橋にあった松屋が、銀座へ引越して来る。三越、松坂屋の銀座への進出と、三つのデパートが割合遠く離れていない所へ来たということが、今日の銀座の発展に随分つながっているのだと思います。三つのデパートが震災後進出して、もちろん昭和のかなり後になつてまゝつていったわけですけど、そういうことがあつたために段々日本橋というものと銀座というものの性格が変わりました。人間の歩いている数とか服装は別にいたしまして、現在では、日本橋の比でないくらい銀座が発展して行つたのも、昭和になつて三つのデパートが銀座に来たといふことが、随分大きいと思えます。

皆さん、今の夜の日本橋を歩いてみてください。江戸随一といわれた日本橋の商店街なんて、寂しいぐらいでございます。八重洲が素晴らしく発展したから、その埋め合わせになつたかもしれませぬけれど。かつての日本橋を渡った北側から伊勢商人の本拠地とい

われるような江戸通りに至る、ああいうところの人間が、どんなに少なくなつてしまつたか。こういうことを言つちや何ですが、ある一町会の商店へ行つたとき、「あなた方万一災害が起こつたら、どこへお逃げなさるんですか。」と聞いたところ「一応皇居前広場ということにして監視庁に届けてあります。」と言つて「いざとなつたらここからじゃ皇居まで逃げて行くには相当ありますね。」なんて言つたら「そんなに心配はいらないんです。」と言つたので、「どうしてですか。」と聞くと「実際に逃げて行くのは二十人といはしません。」と言つて「すよ。今の町会です。そういう状態が今日の日本橋の大商店の大通りといふものを、ある意味で表現しているのではないでしようか。旦那衆は皆自動車で、或いは新幹線でお通いになつて。住まなくても朝来て夜帰って行くのも商売には間に合ふ、夜泊まるのは留守番の人だけという状態です。そういうお店が随分増えてまいりました。今は店員の方も背広を着てお勤めになる方が、商店なんかでも多いんですが、そういう方でさえ新幹線を通つていの方なんかがあるんだそうですね。そういう時代の相違なんか、商店の変化に大きな影響を与えているように思ひ

ます。

江戸時代、江戸随一と言われた日本橋・京橋の商店街ですけれど、私達が見た震災後の素晴らしい時代を通り越して現在の夜の寂しさというもの。こういうことを申し上げては何ですけど、昭和九・十年頃銀座へちよいと飲みに行こうやなんて言うとき、タクシーをひろって来ると着くのが8時半頃。それから一杯飲んで家へ帰って行くほどに、銀座の夜は賑やかになった。そういうことを皆さんに知っていただきたい。銀行が表通りに進出してきて寂しくなったのは戦後のことでございます。本当にこんなことになるのは僕等は戦前から『京橋区史』『日本橋区史』をやってきた人間にはとても考えられないことでした。

昔は十二時になっても割合平気だったのはタクシー代がタダみたいに安かったからなんです。私はずっと赤羽から通っておりますが、ここから四人なら四人でばつと乗って家まで帰るのに、一円も払えば堂々と帰って行けたんでございますから。神田の古本屋で本を沢山買ってタクシーを停めて「赤羽まで」って言うのと「七十銭。」て言うんで「よかろう。」ってなこと、七十銭で家まで帰ったことが何度もありますんで、値段だけはよく覚えてるんで

ございます。本を積んでいても赤羽までそれくらいで帰れた時代でした。競争になってからも、まだそれほどガソリンの統制が行なわれていない時代。タクシー代がいかに安かったかということ、皆さんに知っていただきたいと思えます。

こういうことで銀座の街は、日本橋を「夜の世界」においては次第次第に抜いて行ったのでございます。言いくらいなことなんですが、今日仮に銀座にしても夜の世界の明るさといったら昔の比ではないんです。昔の銀座は両表通りのひとつ脇へ入ってからはばらく、こっちは数寄屋橋まで行く間、こっちは三十間堀までの間びっしりと飲屋、食い物店。夜の盛り場の賑わいなんてのは物凄かったんです。今で言うところ、六本木の一部で肩がぶつかり合うくらい込む時間が夜ございますけれど、銀座にもそういう時代があったということを知っていただきたい。それが随分違つてまいりました。銀座の旦那衆もそういうことの寂しさは実感感じていらつしやることでしょうか、なかなか難しゅうございまして。

私達が学生の頃はあまり銀座へは行きませんでした。「銀座というところはとつても高い所だ」とか「手前たちの銭で食つたり飲んだり出来る所じゃない」という言葉が、学生達の身に染み付いておりまして、新宿とか何とかが行って少し安くあげようや、ということ、で神楽坂をぶらつく程度でした。多くの学生は銀座という所は学生とは一歩違うんだという感じを持っていました。

こういうことを言うと怒られるかもしれないませんが、今の旦那衆とは桁違いのもんでございましてね。もつとも今だって日本橋・銀座の旦那衆の中にはいろんな芸事をお習いになつていらっしゃる方もおられます、歌舞伎で成田屋さんなんか歌舞伎十八番の『助六』をやるなんてとき、御簾を上げて中にお入りになつていらっしゃる旦那衆。御簾を下ろして「河東節」が始まるわけでしょう。その『助六』の「河東節」を唄う方が今でも銀座や日本橋の旦那衆の中においでになります。その旦那に「ちよっとお話があるんですけど」と行つても「歌舞伎十八番をやつてゐる時は駄目です。御簾の中に居るから。」とおっしゃる。皆さんのお考えになつてはいる日本橋・京橋と少し違うんです。こういう姿がまだまだ今日にも残つてはいます。そりゃ決して魚河岸の旦那衆だけが御簾の中に入つて「河東節」を唄うわけではございませんけれど。

戦後のことです。私は兜町の証券会館でよく講演させていただきましたが、私が夕方帰る頃、四時頃ですが、エレベーターを待っていますと着いたエレベーターから三味線を抱えたお師匠さん達が、ぞろぞろお降りになつて来る。聞くと、これから皆さんが芸事をお習いになるとおっしゃる。私戦後の話をしてゐるんですよ。皆さんのお考えになつてゐる日本橋・京橋の姿とは違う旦那衆の姿、あるいは中々働いていらつしやる方々の姿にそういうものがあるということ、ここで皆さんに言つておかないと歴史に残らない。皆夢中で場立屋ばかりやつてゐるかというと、そんなことはございません。カラオケなんかと違うものをまだまだお習いになる方もある。そういうことも姿のひとつだと言つていいんじゃないでしょうか。

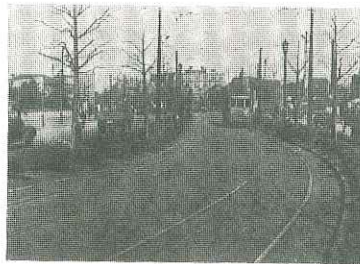
### 三 魚河岸の移転 芝浦から築地

な広さを持っていた。そういうものが震災後移転でもって無くなったしまったのですから、昭和で一番変化したのはあのあたりだといっていいと思います。今はもうびっちり埋まっちゃってどこがどうだったのか、今行っても昔の魚河岸の姿はごさいません。僕が「魚河岸」という言葉を使うと、日本橋の傍ら、納屋がずつとあつてそこに魚があがつていたために、そこを「魚河岸」と行った意味で、あそこで商売したのが初めてごさいますから「魚河岸」という言葉は正しいんでごさいますが、本当の魚市場というものは、ずい分な広がりを持っていたわけでごさいます。そういう所が無くなって普通の町家になったということ、商店街になつて行つたということも、魚河岸が無くなった後、昭和の日本橋を活気づける大きな原因になっていたんでごさいます。そういう所が段々人口が減り出しましてね。夜の世界はずい分人口は少なくなる。日本橋の昔の繁昌の夢ももう一度と、夜の世界までそれが広がることを僕は望んでいるんですがね。

その代行として語らなくてはならない話として戦後のことですが、八重洲の大発展というものがあつたわけでごさいます。東京駅に八重洲口という表口が出来たわけなんです。昭和の初めまでは丸の内側、向こうが何とんでもメインでございましたから、こっちへ来るのが実に不便だったんで、しょうがなくて都庁寄りの所で路線をまたいで渡るようなのが、戦時中八重洲への通り道としてできたぐらいでございました。皆さんそこをどつとどつとこ渡つてこちら側へ来るというよりのな姿が東京駅にございました。戦後になつてからの八重洲の発展は全く夢のようでした。僕らぐらゐの年の人で、どつかへ行っちゃつて今東京へ出て来て八重洲の大通りの街を見たら、龍宮場から帰つてきた浦島太郎みたいに、全く違う所へ来たように思ふぐらゐの変化の仕方です。そういう意味で八重洲の街は素晴らしいものになりました。もうひとつ大きな変化は、言うまでもなく震災後に昭和通りができたという事です。僕らは『京橋区史』をやるために近所の人に聞いて歩いてたんですけど、表通りに店屋を開いた人で道が広がつた折りに両側に移動した家はかなりございました。そういう家々にお話を伺いに行くと「実に情ない」とおっしゃる。「朝起きると『おお、元氣か』と言つていた道を挟んだ向かいの家が、昭和通りが出来たため口をきくどころか、どこの人だというように顔をするようになつてしまつた。実に

情けなくて涙が出る。」とおっしゃる。私が昭和九・十・十一年と聞き取り調査に歩いていたら、昭和通りの両側にお住まいの方々は、つぶやくというか嘆きというか、そういうお話をして下さいました。昭和通りが広がつたおかげで、人間的なつながりというものが段々薄れて行つたようです。

でも後藤新平さんの計画によつて大通りが出来たことは、どんなに助かつ



昭和通り

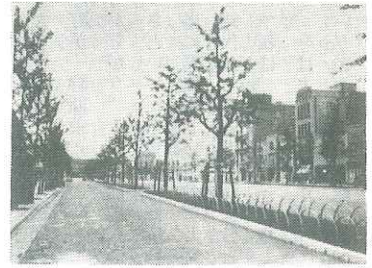
たことでしょうか。戦災の時、その効用を発揮いたしたことは、皆さんご存知のとおりでございませう。

余計なことでごさいますけれど大正九年ごろ東京駅へまっすぐな道をこしらえようということになつて、東京駅の日本橋側に出口を作りたいというのです。今八重洲通りと呼ばれております。震災前で最大の問題は何かという点、京橋区と日本橋区というように行

政面で分かれていたことでごさいます。その分かれた所に八重洲通り、あの広い通りが出来る。どっちの町を削るかということになる。皆さん。これは住んでみない人には分からないんでございませうが、どっちを削るかによつて町が無くなる。

「俺の家は明治の親父さん以来住んでいるんだ。京橋区の俺の町削つてみる。ただじゃおかねえ。」そうすると日本橋の方は、「冗談言っちゃいけねえ、お前の方を削る方がずっと効率的だ。地図を見てみる。」ってなことを言う。今は中央区としてひとつになつていますが、八重洲通りが出来るってことがどんなに大変な問題であつたか。皆さんにこういふことは言いたくないんですけど、京橋区の町が削られて通りが出来上がっています。

昭和通りが出来たとき、多少問題はあつたけれど震災復興を兼ね合わせてやつて行つたから、それほど問題は無かつたんです。八重洲通りが出来るときは、「楨町線問題」といつてどの楨町がなくなるかということで、ずい分大変なものでございました。もつとも江戸時代には、市街が火災で焼失した後復興計画で、焼けちゃつた後をつくりその町を潰しちゃうつて広場や何かにするつてなことがある。日本橋の町で



八重洲通り

店が、えんやらさえんやらさと引つ張って潰されて廃材は適当に町の人が使って燃しているとかいうことになる。まあそういう時代があったということですね。

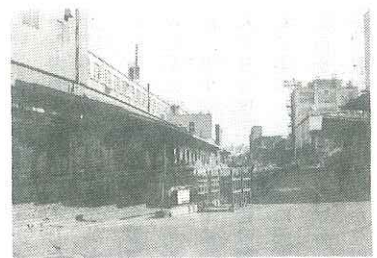
魚河岸の移転というのは確かに大きなもので、中央区の昭和史を語るうえで大切なことだと思います。魚河岸の表通りの所は後、お寿司屋さんがどんどん出来まして、東京名物といわれる一時期があったほどです。今はほとんどそういうものの面影は無くなっちゃいます。表通りの少しへっこんだ所あたりにお寿司屋さんがあったことで、日本橋のひとつの名物みたいなものになっておりました。



日本橋魚河岸

中央市場と鉄道―汐留貨物駅  
昭和の十年代、十一、二年頃築地に中央市場というものができた。大根河

岸の市場なんかも一時ちよつとどいていたのが、あそこへ入る魚河岸の外に、大根河岸、戦時になってから神田市場の一部分も入る、というようなことで青果の部も魚の部もある築地中央市場として出発したということ、これはもう画期的なことでした。ただここで皆さんに言いたいのは、中央市場の中に、カーブを描いたホームがあったということなんです。汐留から出発した貨物がゴトゴトゴト入ってまいりました中央市場に貨車が着く。曲がったなりに貨車がホームに到着して、ガララッと開くと全国から来た荷物が降ろされる。と又トコトコと汐留にへもって行くというような、こういう素晴らしい貨車とホームによる物資の交流、中央市場というものは東京市民だけに売っていたわけではありません。地方へ出すものも随分あったり、向こうから来るものもございまして、こういう名物ホームがあったわけでございます。僕ら戦後しばらくしてホームの自慢話をしてね。こういうホームがあった。列車が着いたんだなんて話をしたら、「川崎さん気の毒ですけどそれ昨年無くなりました。」なんて言われました。名物といわれたカーブしたホームがあって貨車が着いて貨物が中央市場の中に入った物資を降ろしたり積



築地市場汐留駅

んだりしていた時代というものの、鉄道と中央市場の結びつきなんてものが、もう夢のようです。今は、トラックの積み荷が入りしていますから、貨車輸送なんてものがほとんど必要なくなりました。今行ってみてもホームの跡形もありません。中央市場の中にも、このように大きな変化がありました。

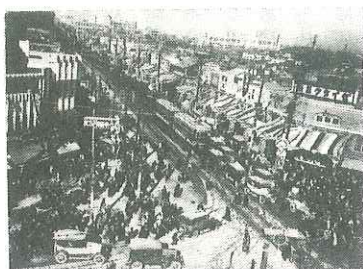
四 人形町の変化―久留米緋の衰退

次に人形町の変化ということについてお話をいたします。

私が小学校を卒業したのが、大正十二年で早稲田の中学へ入って早稲田の大学へ行ったわけですけど、中学へ入るまでは、緋の着物で袴をはいて登校していました。まだ赤羽のあたりで洋服を来て学校へ行くなどということは、ほとんどありませんでした。座談会などでお話を聞くと、まだ日本橋の中心

部の方々でも、着物を来て登校していたお話もなされる方もございます。今盛んに各町々の旦那衆を呼んでは、聞き書きを取っている最中ですが、ほとんどの男性は「久留米餅」を来て登校したわけでございます。それが人形町という町を一時、明治以降大正にかけて支えていたのではないのでしょうか。小学生のほとんどが着るほど需要がありましたから、人形町にはたくさん「久留米餅屋さん」がございました。このことは皆さんにも知っておいてもらいたいと思います。しかし関東大震災の後には、段々と洋服を着る人が増えまして、衰退いたしました。このようなことが商店街としての人形町の姿を変えていったということも皆さんに知っていただきたい。私の小学生の頃の人形町の賑やかさといったら、とてもとても言葉では言い表せないほど素晴らしい賑やかさでございましたけれど、関東大震災後のそうした様変わりでも、人形町が一時期栄えたといっても、栄え方がちがう。それ以前の人形町の賑やかさといったら東京の商店街としては本当に素晴らしいものでした。そういう時代から見ると今は随分と違う。ここで私は、皆さんに一言申し上げますが、今は人形町に雨が振っても歩けるというアーケードを取っ払ってしま

った。これが大成功でございました。箱崎町一帯はインターチェンジの関係により発展とともに、人形町が又復活しかけています。私たちがしょつ中歩いていきますけど、本当に人形町が昔のおりになるかならないかは分かりませんが、近頃人形町のもり返しを感じるようになってきたのでございます。皆さんの中で大分議論があつての取っ払いで、余程皆さんが決心して取っ払ったわけでございますが、人形町が今、盛り返そうとしようとするんじゃないかと思



人形町

## 五 八丁堀の賑わい

その次に八丁堀の賑わいという話をします。それはもう、失礼な言い方でいいますが、昭和九年から十二・三年位にかけての八丁堀の賑やかさ、すずらん通りの賑やかさといったら、もう袖

がぶつかかるほどの人通り、大変なもんでした。八丁堀は、こっちの方と違いました。道が狭いんです。その狭い通りはお昼過ぎから2時ぐらいまでものすごい人でした。私は今の皆さんと、八丁堀という町についての感じ方が違うんです。本当に入船町とか何とかが、港町的な気配を示していた頃ですから、陸に上がった人たちが、そういう商人達が、ぞろぞろぞろぞろ、八丁堀の通りを集団で大勢お歩きになって買い物

をなさる。そりやもう八丁堀の店へ行って色んなものをどんどんどん買って行って、又港町から船に乗って去って行くという風でした。映画館はいくつもなくもあり、寄席なんてもあつて、そりやもう今の八丁堀から見ると考えられない。昭和戦前における、八丁堀の賑やかさというものはすごいものでした。道が狭かったために僕らが賑やかさを特に感じたのかもしれない。そりや日本橋や銀座の通りよりな広さでは、ございませんでしたから、これは本当にすごいものでございまして。こういふ八丁堀の賑やかさなんてものをお話するのも、もう私らぐらいの年、まあ私がまた血気盛んな頃でございました。戦後の八丁堀なんたって一時は賑やかなこともございましたが、昔とはちがいました。段々段々に

八丁堀が衰えてまいりました。今じゃもう札東でほった叩かれて立ち退いた人達なんかも、ございました、八丁堀のこんな素晴らしい賑やかな物語も僕が話すと「あの野郎、浦島太郎の話でもしてるんじゃないか」と思う方がいるほど変わってしまった。しかしこういふ八丁堀の賑やかさなんてことも皆さんにここでお話しをしておきたいと、こういふわけでございます。

## 六 大不況時代の話、兜町と熨敷町

それから大不況時代のお話し。昭和二年にガラがございました、今私が下手な話をしなくても色んな本が残っています。当時の蔵相や商工大臣なんかが議会でもって、台湾の銀行がどうも危ないという話をして大変な騒ぎになりました。銀行がモラトリアムということで店閉まいして大変な騒ぎになってしまいました。これが日本の大不況、東京から大ガラが起きました。うっかり議会でしゃべった答弁が大事件をひきおこしました。ここで皆さんにおわびのために日本橋区史の下巻をもってきたんです。私一人ではなくかなりの人で日本橋区史の下巻の編纂をやったんですが、このときに兜町の経済のところをお読みになれば分かることですが、取引所のことばかりが詳しく

書いてあって、株屋さんのことはほとんど書いてございませぬ。私たちがもずい分お話を聞いたりして色んなペーシのものを書いたんでございませぬ。この頃はいわゆる八大証券、今の四大証券のもととなった大きな会社が段々出てきた時代です。古いものでは、今日私書いて来たんですが、山一証券などといったものと別に山二の片岡さんとか玉塚さん小布施さんなどの株屋さんがございませぬ。それで資本金の順にするか古い順にするか、僕たち歴史をやってる連中は、古くて小さいお店、ささやかにやってるお店が大事なんだから、そういうところをうんと書こうや、と言ったんです。「資本金なんかでは、そう言うところが落っこちちゃうじゃねえか。」という主張が当時の当局側に入れられませぬで、そういうことなら全部やめちゃうと、そういうことで取引所のところを株屋さんの話とはほとんど乗っていません。おそらく三十ペーシやそこら以上の分を僕ら書いたつもりですが。そういう証券会社とどんだんだんだのし上がって来るとき、僕は古くからやっていてまだ続いている親子何代かやってるところを書こうじゃないか、と書いていたんですが書けませぬで、日本橋区史の経済のところを株式取引所を書いて株屋さ

んの歴史の原稿全部外してしまつたわけです。今だから言つていいことだと思ひますが、中央区史にはたくさん書いてございませぬ。中央区史の中巻には、ずい分こういうことが書いてございませぬ。昔にさかのぼつて書いていたことももりです。ただ私は株屋さんのことで是非知つていただきたいことがあるんです。私が行つていた大学の文学部時代、よその科の人も一緒に仲良く机を並べておりました。僕と仲の良い、名前は言ひませぬ、まだ生きておられますから。その人が突然学校へ来なくなつてしまつた。どうしたんだらうと思つていてしばらくたつてから、ひょっこりそいつが出て来て一年ぐらい休学するといふんです。空株を買つていたお父さんに大ガラが来てしまつて、家から何から全部そっくり投げ出してだめだつた。彼は私に「俺部部の方へ行つて親父と一緒に裸一貫になつて出直す。だからしばらくやめるからな」といつていました。私は株式取引がどんなに恐ろしいものかを身をもつて知りました。当時の空株の取引というものには恐い。そりゃギューちゃん儲ける『大番』という小説もございませぬけれど、逆に私が申し上げたような人々が昭和二年の大ガラ以来出ている。兜町でそういうことをやっている人は、

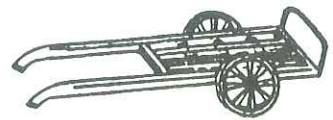
どんなに不況が来てもどんなにすつてんでんになつても「シマ」と申します。が、そのシマの内にいる限り一生食いつぶされることなく面倒見てもらえる、というのが戦前における「シマ」の鉄則でした。しかし「シマ」へ通つて空株を一杯買つて先物をもっている人はガラですつてんでん。実株じゃなければ駄目だと痛感いたしました。



東京株式取引所

それと株式取引所の場立ちですが、あれは今とあまり変わりがありません。むしろ今の方が素晴らしい勢いかもしれません。ただ姿が変わりました。小さいお店なんかは、僕らが区史をやつてゐる頃は、まだ前垂掛けの人がいました。ハンチングをかぶつて草履はいて飛び出して行くような人が、段々洋服・靴になりました。今こんなことを言うとも夢のようですけど、名物の前垂れは無くなつてしまいました。

名物といえば、横山町、馬喰町の間屋街における三泣き車というのがございました。狭い横町でも荷物をつんで通れる小さな荷車ができて盛んに利用されるようになったのです。これは丁稚さんが小さく荷物を沢山運ぶので荷のおろしや運搬の仕事が増え泣く泣くというのと、これが出てきて細い路地りが必要なくなり、失業して泣くこと、それと車がギイギイと音をたてて泣くもんですから、三泣き車といひました。狭い道にある問屋さんなんかは、これ無しで商売はできなかつた。今はどこへだつて小さい車が入りますけど。もとは、お店と倉庫が離れていたりすると、わずかな距離をもつて行くのが大変な仕事だつたために丁稚さんが泣いていたという時代にこの車が考案され、荷物の運搬が楽になつたわけです。今



〔三泣き車〕

は無くなってしまうましたが、僕なんかは、これは文化的な価値のあるものと言っておるわけでございます。そういう車が、まだまだ残っているらしいので、いつか皆さんにお見せする時が来るかと思えます。

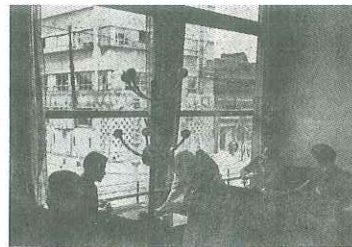
## 七 特殊喫茶店全盛時代―東北農村の娘さん

これからの私時代である昭和九年頃からのお話をして行きたいと思いません。とにかく銀座の夜の明るさといったら、これも昭和二年のモラトリアムと関係がございます。大不況時代が東北農村に及ぼした影響というもの。こういうお話をしたいかどうか分かりませんが、皆さんに知っていたいだきたいのは、銀座の店に、大特殊喫茶街ができて、戦前におけるグッド・オールドデイズを作っていたということ。銀座の明るさを支えていたのがこの特殊喫茶店であったわけで、東北の娘さんたちはここで働いていたのです。大不況のとき東北農村では、どれくらいの人がかわいい娘さんを手放さなければならなかったでしょうか。そしてその娘さんたちは、どんどん東京に出てきまして、かなり銀座の特殊喫茶店街へ入ってまいりました。そりゃ戦前における千疋屋や資生堂のフルー

ツパーラーへ入ることが、しゃれた喫茶店へ行く人のひとつの見栄であったことは事実ですけど、こういうものは全く違った喫茶店が裏通り両側一杯にあつたということも知っていたきたいことであります。そういう裏通りにおける喫茶店というものは昼間でもかなり暗くて、大体十時半か十一時頃に店を開きまして夜までずっとあるんですけど、昼間と夜とが値段が違います。

昼間はお茶だけなんですけど若い女性がコーヒ一杯、紅茶一杯でも、そばに来て座ってくれるんです。これが特殊喫茶店でございます。色々な世間話や自分の生まれた農村の話をしてくれたりするので、僕は、そういう女の子に会いたくて夢中で通った時代がございます。これは銀座の賑やかさというものを支えていました。夜になつても特殊喫茶ならほられず、少しはそういうこともありました。けれども一般のカフェとはずつと違つていて、カフェを圧迫するほど、まあ銀座のカフェなんてものは、そんなことではピクともするもんじゃございませんでしたけど。銀座のパーやカフェなどでは、多くの小説家たちがとごろを巻いく場所が決まっていたりして〇〇のグループは△△カフェとかそんなふうでしたので我々学生などが行って

も全然相手にしない。背広を来て行つたつてただそれだけのことで鼻もひっかけられないようなカフェやなんかが多かつたわけです。ですから私たちがしようがなく、特殊喫茶店を好んで行って女の子と話をして帰ってくるのが、最上の楽しみみたいなもんです。



喫茶店

その頃の銀座の裏の呑み屋なんて行ったら軒並みおでん屋さんで、もうどこへ行つても飲む店がワーワー言つてましてね。

「そろそろ11時になるぞ。帰ろうか。」  
「よからう。」と言つてタクシー、これからタクシーの競争の話をしたんですけど、タクシーを呼んで「赤羽まで」なんて僕らが乗つて夜の11時くらいから行くと、ものの30分か40分くらいで、すと赤羽まですつ飛ばして来られる。それも一円も払えば御の字という時代でした。さすがに銀座からは

一円を切つては乗せてくれませんでしたけれど。それでも、神保町あたりからだと七、八十銭で、いくらでも値切つて赤羽まで行けるという時代がございました。

こういうことは後になつてから分かつたことですけど、ソビエトからセメントと交換でえつさえつさと朝鮮のセメントを持つて代りに日本にガソリンを持つて来た。そういうことを、あまり良く知らなかつたと一部の歴史家が言つておりますけど、どの程度まで本当か分かりません。ノモンハンなどにおけるトーチカは、日本から持つてつたその朝鮮のセメントで造つたんだといひます。その代りガソリンがほとんど来て、浅草からなんか一度僕は銀座まで三十銭でOKといわれたことがあるんです。皆さん、こんな話信じられますか。自分が乗つたから、こういうこと言えるんですけどもね。本当に値切る方と乗せる方が競争で、駆け引きでもつて皆、「三十銭」「五十銭」なんてことを言つて、銀座から浅草まで三十銭で乗つて行つた。どんなにタクシーが安かつたことか。想像を絶することでした。

銀座のカフェというのは確かに高級でございました。かなり小説家や文芸評論家などが根城にしていて、そう



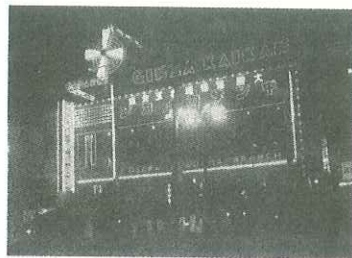
いう方々のお話相手をするんですから、そういうレベルのお話が出来なくちゃ、銀座で何の何としような一流のカフェーの女給さんは動まらなかった。一度区史の聞き書きに行つて有名な女給さんにちょっとお目にかかつて色んな話をしたら、あんまり知識の幅が広いのでびっくり仰天して逃げ帰つて来たことがあります。それはかりではない。余計なことですけど、新橋の芸者さんを訪れてお話をしたとき、そのレベルの高さ、お客さんへ話す内容の高さなんてものは、本当に皆さんの前で言っちゃ悪いけど、大したものでした。私なんかが本当にびっくりするぐらいの知識を持っている芸者さんが、ずい分おいでになりました。そういうところ

つてのは、教育を受けた芸者さんなり、カフェーの女給さんなりが、新橋や銀座を支えていたんじゃないでしょうか。

### 八 大阪カフェーの進出

銀座では博品館の方の側でございますけど、「カフェ赤玉」という大阪資本が大進出しまして、長い間口のお店でカフェーを開きまして、そりゃ銀座のカフェーの値段よりずっと安いんです。銀座のカフェーの方々は安けりゃいいってもんじゃないと悪口を言ったけど、一般大衆は、そこへ行きやもう

サービスして色んな話をしてくれて「あすこのカフェーは行った方がいいぞ」「大阪風が来たぞ」てな具合で、一時は銀座の遊ぶ場所を占拠するんじゃないかと思うほどに、大阪風のカフェーがどんどん進出してまいりました。銀座の今のバーなんか見ると、随分高級なようでございまして、そういう大阪風のやり方でやつて行くというのは、



カフェ

戦後はちょっと起こらないようでございます。こういう大阪資本の進出が、一時高級というものと対抗して「お安く遊ばせませう」というカフェーが「赤玉」を中心にしてありました。

戦争が激しくなるうという時代でございます。どんどん世の中も変わってまいりました。皆さんの前でですけど、昭和の中央区を語る上で右と左の話をしなくちゃならない。もう大変なものにしてね。ことに上海事変が始まって

以来というものの、ここに京橋区史を持つてまいりました。写真を見ていただければお分かりいただけるとおり、戦争中に下巻を出したものでございますから、現況を伝えるような写真は僕らはどれだけとつたか知れないんですけど、あまり入っていない。皆に戦争中までの「グッド・オールディズ」といわれ、銀座を席巻する勢いだった女と対話できるといふような特殊喫茶店の華やかな時代。そういうものやなんかを写したものが、何ひとつここに載っていない。パチッとやるのが後に禁じられますけど、正式に禁じられる前から取締りがありまして、町の姿なんかは写してはならないことでした。随分僕らは撮ったんですけど、許可にならないものは九段の軍人会館という憲兵司令部があった所に、フィルムを提出してからでない、こういう区史なんかには使えない。フィルムを何本も何本も何度も何度も軍人会館の憲兵司令部に持って行きました。

「京橋区役所として区史を出すんで、こういうのを載せたいんですが。」と

「預かってできるだけ許可するようにしますから。」と実に優しい言葉で言ってくるのでございますが、なかなか戻って来ない。それで何回か行って

「いかがでございますでしょうか。もうそろそろ写真を決めなければならぬんですが。」なんて行くと

「できています。お返しいたします。」できています。全部返ってきたと何だか分からない。全部返ってきたと喜んで持つて行くと、大概町の写真です。それから横に撮ったのが多いんですが、そうするとフィルムの裏へべつたり白いペンキみたいなのをのせちゃって、何が何だか分からなくなつて戻つて来るわけです。そういうことがあつて京橋区史に載せられなかった。こういうことなんてのは、私が言わなければ埋もれちゃうことかもしれないんで申し上げるんですけど、街の姿というのを割合沢山撮ったんですけど、そうやって裏にペンキを塗られては手も足も出なかつたんです。こういう中で京橋区史を出版しなければならなかつた私達の苦しみを知っていただきたい。ほんとうにどれだけ軍人会館へ日参したか知れませんが駄目だったのでございます。戻してはくれませんでしたよ。ご親切に白いペンキで裏を塗つてね。それでも僕は捕まるようなことはありませんでした。上野の公園から撮った人なんかほとんど捕まって、一晩泊めおかれたりしたようです。私はそういうこととは無くて全部裏を白ペンキで塗られ

ただけでした。だけでも真白に塗られたものはひとつもありません。三分の二ぐらい塗って戻してくる。「それでも撮影した部分は残してやったぞ」なんて、残してなんていやしない。大事などこは全然残っていない。やはり空を気にしていたようです。だから空をあけて撮った街並みなんてのは削られてしまったわけでございます。そういう時代が区史編纂なんかにおいてあった。とても皆さんには想像できないことでしょうが。

#### 九 お迎え自動車↓デパートの競争

後は、お迎え自動車の話をしなくちゃならない。大不況時代のことですから、何とかしてただで乗ろうという連中が一杯いた。つまり上野の松坂屋は万世橋、神田、あと上野の駅でお客様をお迎えする。ガソリンが安い時代です。お客様は上野の駅なり神田駅なりから松坂屋まで乗って来る。到着するところぞろぞろとお降りになります。でも中へ入るとすぐ出て行っちゃ。そこには三越から迎えるバスが来るから、乗って三越なんか行くと、東京駅行きなんていうバスが来ている。有楽町へ行く、有楽町の三越、松坂屋まで、有楽町へ車を出しておりましたから、それに乗れば上野から一銭

も使わずに銀座まで来れる。こういうのがお迎え自動車。ただで乗れるんですよ。それに沢山乗る人がいて、立っている人さえいたんですよ。お迎え自動車なんてのは、昭和の大不況時代からできたことなんです。今でも三越なんか、お迎え自動車ありますけど、あれは駅じゃなく自分の店のどこかにちゃんと連れてくことになってますけど、そういうのは昔のお迎え自動車の名残りです。銀座のお店なんかは、有楽町だけでなく新橋にもお迎えを出している所もありましたし、大分頻繁に出していたようです。頭を使えば上野から銀座までただで来られた。こういうことができた時代があったということを知っていただきたい。まあ戦前のお話で大分時間が経っちゃいましたけど、あと十五分くらいしゃべっていいでしょうか、それでも戦前終わらないけど、もう三つばかり勘弁してしゃべらせてください。

#### 十 両国国技館と西両国の賑わい

素晴らしかったのは、双葉山全盛時代の両国国技館、そりゃ双葉山の人気は凄かった。両国で相撲を見てお帰りになる皆様というのは、両国橋を渡ってこっちへ来て、日本橋でお飲みになった。旦那衆なんかには、そういう方



三越



松屋



松坂屋

がずい分いたということ、今とちょっと違うんですよ。柳橋の、両国からきたあたりの料亭は、相撲が終わってから飲むお客さんで一杯だったということとは知っていただきたい。

双葉山の全盛時代は、そりゃ国技館は賑やかでした。相撲の無いときだって、十二段返しだの何だのを国技館でやって、わざわざ両国橋渡ってこっち側の人が見に行きたかったです。

色んな余興があったので、相撲の無いときもかなり東両国に行っておりました。しかしお飲みになる方の三分の二は、向こうでちよいとひっかけて帰って、あとの三分の一はれっきとした方で橋を渡ってこちらへ来て柳橋だの両国界隈の料亭でお飲みあそばす。両国の賑わいも、とてもとても素晴らしいものでして、今は東両国の面影いずこにありやと、言いたいぐらいです。

#### 柳橋と花火

日本橋の旦那衆がおいででございますのに勝手なことを言って申し訳ありませんが、本当に大変なものでございました。ことに花火の時の両国なんてのは。昭和の十一年だったか十二年だったと思いますが、ゆかたを着て一度両国橋を渡ってやるうと思つて、駒下駄にゆかたで行ったら、もうもみくちゃ。

来た以上惜しいから渡ってやろうとして、揉まれ揉まれて向う側へ着いたのはいいですけど、ゆかたがびっしょり。絞るほどの汗で花火の後戻って来る時の辛さなんてのは大変なものでした。そりゃ戦後の両国花火だって随分人を集めた時代もございましたけれど、柳橋に防潮堤ができたために加茂川の前料亭みたいに、隅田川へのり出して花火を見物するということができません。そのため柳橋の衰退というものがございませう。本当に防潮堤ができたということが、随分大きな影響を与えているんだと思います。縁先へ出て一杯飲む柳橋の気分なんてのは、とてもとても今とまるで違う。ドブ臭いとか何とかいかうかもありませんが、当時の柳橋なんてのはそんなことは無かった。皆良い気持ちで飲んでたものでしたよ。ですから戦前における柳橋なんてものは、決して花火ばかりじゃない。東京には方々に花街がございまして、そういう各々の花街が賑わっていた時代が戦前あったということも、知っていただけだと思えます。

#### 十一 築地本願寺と築地小劇場

次にお話ししなけりゃならないのは、築地小劇場についてでございます。これはただけはぜひ皆さんに聞いていた

きたいんでございますけど、何しろ関東大震災後大正十三年ですか、こういう早い時期に築地小劇場ができたということはたいへんなことでした。そりゃもう我々若い連中の血を沸かすほどの存在でございました。そりゃ僕らだって「成田屋」「播磨屋」って東劇で騒いだりしてました。菊吉合同の芝居なんてのは、そりゃ素晴らしいもんでした。そして六代目が松王をやって播磨屋が源蔵をやる『寺子屋』なんてのは、当時僕らを唸らせたもんで、もう興奮してしょうがないほどの素晴らしいものでした。築地小劇場も僕らも興奮させるようなものを持っていました。

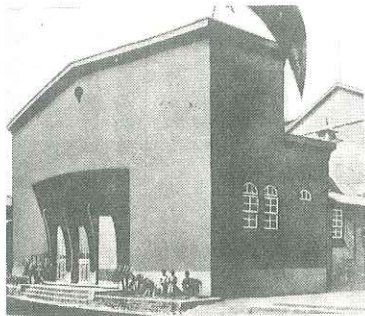
『大寺学校』なんてのも久保田万太郎さんの脚本だけお読みになれば、何てことはない。私立小学校が公立小学校ができるんで段々駄目になって行くというような話。共田恭助と汐見洋という二人がやりました、本当に僕ら興奮してそのまま家に帰るのが惜しくて、「万世橋まで歩こう。」なんて神田駅から帰ったことがある。それほど興奮させる材料を持っている素晴らしいもんでした。里見弴の『たのむ』という芝居を田村秋子と丸山定夫がやって、これなんて素晴らしいものでございましてけれど、丸山定夫が慰問の興行で広島に行っていたとき原爆で死んでし

まったのは残念なことではございました。恐らく皆さん『国性爺合戦』を通して見たことなんか無いでしょうけど、小山内薫さんがアレنجシして僕らにそれを見せてくれた時代がございましてね。それは本当に素晴らしいもんでしたよ。

そういうものの他に外国物、シエイクスピアなんかも随分やりました。『ハムレット』なんか何度見たか知れませんが。青山杉作さんなんかのやる『役行者』なんかは何回も見た記憶がございませう。東山千栄子さんの『桜の園』なんかもやってましてね。彼女を見なけりゃと、わーと人が集まったりして、素晴らしい『桜の園』でございました。

こういう芝居を見て唸らされた僕らは、何と幸せだったんだろうと思います。思想的な問題で、小劇場が分裂してしまっただけというものは、小山内さん達のいう芝居とは、色々変わってしまっています。友田恭助さん達が、そういう人から見れば右寄りなおとなしい芝居『リリウム』なんかを田村町の飛行館でやる。もう片方は、猛烈に活躍しまして、本郷座だの何だのに行く。山本安英さんが、浅草にまで進出して旧十二階下でもって『何が彼女にそうさせたか』なんてのをやった時は、超満員で立見席も無いほどでした。築地小劇場が、そういうことで幅を広げて行

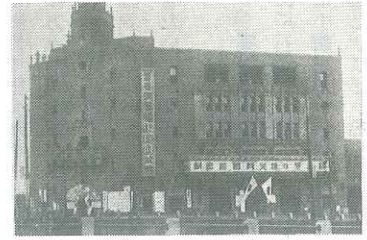
ったのは確かです。本当に日本の演劇界に素晴らしい影響を与えたことは、日本橋・京橋の歴史を語る上で、忘れられないことです。



築地小劇場

#### 東劇と新橋演舞場

しかし片方においては東劇がございまして、六代目と播磨屋さんが、素晴らしい芝居を見せる、『四千両小判梅葉』なんていう小伝馬町の牢屋敷を、ちゃんと再現し、実演してみせる芝居なのは、他の歌舞伎にはございません。東劇は、本当に素晴らしいものでした。今の東劇は映画館か何かになっちゃって、昔のそういう時代を思い出すと涙が出ます。

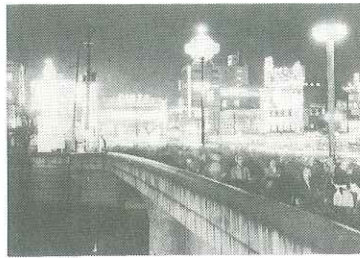


東劇

## 十二 数寄屋橋と日劇

あと数寄屋橋。御承知のとおり江戸時代南町奉行所があった時は、橋は斜めに町奉行所の方から架かっていて、大体今の荅番館へ出る通りの所に橋が出て、お客様が荅番館の所を通って銀座松坂屋と銀座ファイブの間を通るのが、メインの尾張町でございました。それが今のようになったのは、明治三十年代になってからのことでした。それまでは、数寄屋橋は斜めに架かっていたのでございます。どうも建設局や何かに行っても架かった年が曖昧で、まあ大体明治三十四・五年にはもう立派に真っ直ぐに架かっていた。日比谷まで道路がやっと真っ直ぐに突き抜けて、こういう風に曲がって山下橋の方から来るのと、こっちとが一緒になって尾張町の方へ行くという。松坂屋と銀座ファイブの間の方へ出ていくん

てことが無くなりました。それが明治三十年代になってからのことでございます。真っ直ぐに日比谷まで突き抜けるようになって、四丁目がそれまでと違っただけで、尾張町が中心であった時代がなくなって、尾張町が中心であった時代の面影が全く無くなりました。そういうことで銀座のお話をしただけでも、随分変化があったことをお分かりいただけると思うんです。



数寄屋橋

数寄屋橋の向こうの話になりますが、日劇ができて、ダンシングチームができた時は、大変な騒ぎでした。初めは女の子ばかりで、松竹少女歌劇団に對抗するほどのもんだったんで、随分「わーわー」「きゃーきゃー」言っていたんです。数寄屋橋というものを知らなくても、日劇は知っているという時代もあったほどでございますけど、今は全く変わってしまいました。

私が今の『君の名は』に大変憤慨しているのは、我々の昔のイメージと全く違ったもんですから、NHKに抗議したいくらいです。数寄屋橋は、あれで有名になったわけでございます。こんなに大特急の話だったので、かなり端折りました。色々言い残した、また言えない面もあるんですけど、戦争のことについては、知っていてもいえない。私達こういうことをやっている人間の使命のひとつは「言えないことを言うことだ。」という人もいます。

江戸時代のことなら、こんなの見ないで幾らでも話せるんですけど、何せこういう話は初めてなんです。ですから私の記憶に間違いがありましたら、特別にお許し願いたい。では、これで終わらせていただきます。

(一九九一・七・六講演)

## ☆東京を語る会のお知らせ☆

第65回東京を語る会を次のように開催いたします。

『東京落語の舞台を探ねて』

講師 佐藤光房 氏

日時 平成4年3月28日(土)

午後2時〜3時30分

会場 中央区立京橋図書館 鑑賞室

講師をお願いしました佐藤先生は、朝日新聞の社会部記者として活躍なさり、現在は編集委員をなさっています。著書には「東京落語地図」「もうひとつのプロ野球」などがあります。多数のご参加お待ちしております。

その町から来て、何もわからないなりにやたらと日本橋、京橋を歩き回った点で、見た姿をお話できたんじゃないかと思えます。戦前までで話が終わってしまいましたけど、パート2では戦時中どんなに大変であったかということとを、結局くどくどするわけでございますが、又何かできない話があるかもしれません。今日は本当にこれくらいで終わらせていただいて、あとはパート2以降にさせていただきます。私ね、